

こしえるびと

つむぐストーリー vol.136

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。
“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”の
メッセージをシリーズで紹介していく。

農業はなくてはならない産業

新緑がまぶしい水田地帯のハウスの中で、高橋龍祐さんは、トマトの誘引作業に汗を流す。

高校卒業後、東京で印刷機メーカーに就職した。結婚し、第1子をもうけたが、仕事は全国転勤があり、子育てのため転職を考え始めた。実家のある一関では、祖父が米を作っている。「食べ物を作る農業がなくなることはない」と思い、第2子の誕生とともに、農業をすることを決めた。祖父の勧めで新規就農ワンストップ相談窓口を訪れ、「自分で何かを作りたい」と思いを伝えると、「JA管内のトマト生産者は若手が多く担い手班の活動が活発なことや、夏秋トマトで全国トップレベルの反収を上げる生産者がいることを知る。トマトを生産し、販売する姿がイメージできたことから、龍祐さんはJA研修生を経て、2020年に就農した。

自分なりの栽培を探りながら

龍祐さんは研修で学んだ栽培技術の基に、自分なりの作業工程を見いだしてきた。就農1年目に研修先で行っていた作業を忠実にやろうとして追い付かなくなり、栽培を途中で断念せざるを得なかったことを教訓にしている。2年目以降、自分に合った作業工程を試行錯誤し、12月までの収穫が可能になった。さらに精度を上げようと、複合環境制御盤を活用し、温度や湿度、日射量などのデータとトマトの生育を比較しながら、効果的な肥培管理法を探っている。近年は暑さへの対応が急務で遮熱剤を使用している他、暑さに強い品種にいち早く切り替えた。今年は秋どり栽培にも取り組む。

ハウスは、元は水田だったところにある。水田に囲まれ、何度も浸水してしまうため、排水対策にトウモロコシ栽培を始めた。根を張らせ硬盤を壊す

ことで、排水性の向上を期待している。

トマト産地の拡大を目指して

「鳥獣被害を防げれば」と、就農と同時に狩猟免許を取得。一関市の鳥獣被害対策実施隊員として仕掛けたわななどの見回りに当たり、被害防止の一助を担う。

作業管理にはスマートフォンも活用している。写真や動画を撮り、インスタグラムなどに投稿。「コメントを付けることで見直すこともできるし、全国の農業者とつながることもできる」とSNSをトマト作りに役立てている。

龍祐さんは、省力化しても収量を上げられるような技術を確認すべく、試験を繰り返して、情報収集を重ねる。「仲間と技術を共有し、産地として出荷量を増やしていきたい」。龍祐さんは、力強く未来を見据える。

※ソーシャルネットワークサービス。インターネット上で人々が交流できる。

省力化図り収量を増やし産地拡大へ

一関市赤荻

高橋 龍祐 さん



PROFILE

高橋 龍祐さん (32)

Ryusuke Takahashi

一関市赤荻

1993年一関市滝沢生まれ。高校を卒業後、東京の企業に就職。第2子の誕生を機に農業を目指す。JA研修生を経て2020年就農。トマト22畝、トウモロコシ20畝。妻と子3人の5人暮らし。

